百丈山石峯禅寺は宝塔寺の北に隣る、開山は黄檗の六世千呆和尚なり。〔退院の後此地に住職す〕仏殿は釈迦仏、額は済世法王、又左右に聯あり共に千呆の筆なり。表門の額は即非の筆にして、高着眼と書す。

薬師堂は仏殿の前にあり、此本尊薬師仏長四寸恵心僧都の作にして、多田満仲公の念持仏なり。村上帝御宇天徳二年に、摂州多田郷において満仲公伽藍造営ありて、沙羅連山石峰寺と号し、此本尊を安置す。其後文永の頃兵火のために諸堂回禄に及ぶ時、此尊像を石函に収め山中に埋む。夫より霜星累りて慶長元年の春、沙羅山に夜々光あり。郷人これを怪み其光の本を穿ちしかば、一ツの石函を得たり。蓋に沙羅山連山石峰寺薬師仏の銘あり、則一宇を営て安置す。同八年に庵主宗玄といふものに夢中の霊告あり、都近き所に寺を遷し安置せば、普く人民を化益せんと宣ふ。宗玄仏意に任て、自背に負ふて都に登り、五条わたり因幡堂に暫安奉し、程なく五条の橋東若宮八幡の辺に、堂舎をひらきて石峰寺と号す。宝永の頃黄檗千呆和尚、常に此寺に詣で、薬師堂に尊信ありて曰、我異国より日本へ渡り、黄檗山の祖席に司職する事偏に霊仏の応現なりとて、厚く瞻礼恭敬せられければ、忽公命ありて今の如く百丈山をひらき、此尊像をうつし石峰寺とぞ号しける。

茶碗子〔清泉の銘なり。当寺の門前南のかたにあり、茶の湯に可なりとて好人これを賞す〕